

Title	匿名女史著 若き女工の経歴談
Sub Title	
Author	星野, 勉三
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.2, No.4 (1909. 11) ,p.333(97)- 336(100)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新着批評
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19091101-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

財産の社會は亦個人價值より出立するのみにして、畢竟は物價(代價)成定の理法の支配を脱する能はざるものなりとはシユ氏主張の骨子なり。従て分配論の研究は依然として自由競争を度外視す可からずとの結論を得たるものなり。

予はシユ氏の此説は大體に於て動かし難きものなりと思考す。而して社會主義理論中特に勞働全收論に就て空前の研究を企てたるアントン、メンガー氏の説も亦た私有財産の社會に於て『勞働全收權』の實現し難きことを主張するを見ても、愈々然るを思はざるを得ざるなり。是れ予が小泉君を煩はしたる所以なり。

(福田徳三記す)

新 著 批 評

August Bebel 序

匿名 女 史 著

若き女工の經歷談

(Jugendgeschichte einer Arbeiterin)

星 野 勉 三

近着獨逸雜誌の新著紹介欄にベーベルが表題の如き一書を公にしたとあるから此社會主義の論客は又何か奇抜な事を云ふのだらうと思つて早速一本を取り寄せて見た尤もベーベルの著婦人と社會主義なる本は頗る有名なるものであるから余は遂に此新著も讀んで見る氣になつたのである然るに讀んで見るとベーベルの著でなくして實はベーベルの序であつた。

此匿名女史の誰れであるかは知る事を得ない乍然書中の模様では澳大利の婦人の様に見へる此女の父と云ふのは大の飲酒家で飲めば必ず母を打つと

新著批評

云ふ厄介者で又母は無教育な女であつたから家庭に樂みなど云ふ事は全然なく常に喧嘩を以て満たされ居つた但し此兩人の意見の一致した點は只一つあつた夫は國家が子供に普通教育を強制するのは不必要で其可否は只兩親のみがよく所決し得るのである而して其娘の如きは家が貧困であるから學校へ出すよりは却て工場へでも通はして賃銀をとらせるが適當で子供を通學させぬとて罰金を課するが如きは拘子定規の處置であると云ふ點のみであつた、扱て不和と貧困との間に育つた此娘は到底幸福なる可き筈はなかつたが間もなく父は不養生の爲に死んで其葬式の際に黒の喪服を借りて着た時は却て幸福に感じて此儘で居たいと思つたと自白して居るのは境遇の爲とはいへ乍ら實に淺ましき次第である此父の死後は母が工場へ通つて其手一つで五人の子供を養ふので此娘も徒食して居る譯に行かず僅かに八歳にして女工として工場へ入る事になつた之が爲に毎日規則正しく通學する事は出來ず餘り缺席が多いので其母は監督不行

届として廿四時間の拘留の申渡しを受けたが定め
の時日に監獄へ出頭しなかつたので二人の巡査が
来て連れて行つた然るに其後娘の十歳の時に此家
族が他の町へ轉居してからは年齢を多く届け出で
たので就學の方の監督もなく全然工場にて働く様
になつた左り乍ら星を載て工場へ行き歸り又は寒
中火の氣のない所で指を氷らせて働くが如きは少
女には堪へ難き所で當時彼女の只一の希望は母に
起されずに自然に目の覺る迄眠て見たいと云ふ事
であつた又工場の労働も身體上の困難は扱て働き
雇主中には詐偽的の者があつて手工を教へる事を
約して授業料をとり乍ら之を子供の守りに使ふ者
や又は當初は高い賃銀を約し乍ら種々の口實を設
けて之を直切る者もあつた而して仕事のある時は
未だ宜しいが如何に安い賃銀で働かうとしても仕
事がなく隨て到底普通の食事が出来ない場合も屢
々あつた此營養不良の爲か彼女は或時氣絶したの
で醫者に診察して貰ふと父や祖父のアルコール中
毒の遺傳も亦其一原因であると云ふ事で遂に施料

で入院した中時に病院で仕事せずに充分に眠る事
を得たのは彼女に無上の幸福と感せられた。
宗教に關しては彼女は頗る懷疑的であつた或年の
クリスマスに信心で名高い叔母を訪問し其窮狀を
訴へて補助を乞はんとしたか常に不在で遂には一
偏面會したるに人間の運命は神の意思であるから
有り難く之に服従す可きものであると云つて取り
合つて呉れなかつた又或時は寺で懺悔した所が僧
侶が種々の質問を發して此の如き罪を犯した覺へ
がないかと聞くのだが其質問たるや眞面目なる人
間には侮辱としか聞かれぬ又神に蠟燭を捧げて
も奉納者は之が燃へ盡す迄張番をしては居ないの
を機とし僧侶は中途で之を消して置き暫時の後點
火して又之を他の信者へ賣り付け此の如くにして
蠟燭代の二重取り三重取りをやる又聖母マリヤは
信者の寄附で貴金屬や寶石を以て飾られて居る夫
で彼女は之に祈りを捧げたが歸宅して後考へて見
ると此若き女の頭に殘つた印象はマリヤの難有味
にあらずして其寶石の美なる事のみであつた又或

時信者の團體と共に遠方の名利へ參詣に行つたが
之は只御祭り騒ぎをなすに過ぎないので信心など
と云ふ事は全然問題にならない其一偏の祈禱の終
つた後は皆近所の料理屋へ行つて飲めや歌への大
騒をするのであつた。

彼女は生來利口の方であつたので幼少の時から好
んで文學書類を讀み長ずるに及んでは貧しい中か
ら新聞紙を買つて讀み特に其社説を愛讀した又裁
判の記事も其好む所で被告中には屢々社會黨員が
ある所から之より社會主義の何物なるかを殆んど
知り得て遂に此主義の人となつた特に其長兄も此
黨員であつたので其紹介で他の男の黨員とも懇意
になり以て見聞を廣める事が出来た又其當時ベ
ベルの婦人と社會主義なる本をも讀んで益々此主
義に對する嗜味を深ふした而して後に其派の集會
で演説し又は新聞に意見を發表する迄になつた然
るに其の當時此の女の居つた工場は待遇の頗る宜
しい方であつたのに丁度此處に於て彼女が社會黨
の一員となつたのは一寸讀者に面白く感せらるゝ

所である其後彼女は女工の生活を辭して専心社會
主義の擴張に盡力する事になつたが其無教育にし
て頑固なる母はコンナ政治運動には大不賛成であ
つたソコデ或時エンゲルスとベベルが其町へ來
た序に彼女の家へ來て其母に娘の行動の適當なる
事を説いて貰ふたが此エンゲルスは最早老人でベ
ーベルは此娘の父とも云ふ可き年輩であつたから
二人の歸るや此濟度す可からざる母は頗る不平で
コンナ結婚の望もみない老人と交際し特に家へ迄
連れて來るとは何たる事ぞやと譴責した乍ら彼女
の社會主義に對する確信は益々強くなつてさうし
て次の如きゲオルヒ ヘルヴェーの言葉は必ず實
現するものとして疑はなかつた。

我々が將來より希望する所のものは労働とパン
とを得て子供は學校へ行く事を得老人は乞食に
行く事を要せざるにあり。

之が女工經歷談の大要である其報ずる事實は敢て
珍らしい事はない特に小説などにコンナ事は澤山
書いてある一昨々年頃亞米利加で有名であつた

100 Upton Sinclair の Jungle の如き又は Paul Goehre の Drei Monate Fabrikarbeiter などは事實談として有名なるもので労働者の境遇の悲酸なる事は充分に現はれて居るが宗教に關する事は多く見當らぬ然るに此匿名女史はカソリックの信者であるにも拘はらず遠慮なく之に關する意見を述べたのは我々の大に面白く感ずる所である若し匿名とせずして公然其名を署したならば讀者に感動を與ふる事亦一層大であつたらう。

本誌前號目次

論 說

人生の意義及び價值(第二回)
都市と人物發生の關係
上總介忠輝

川合貞一
田中一貞
阿部秀助

時 評

英國貴族院と自由黨内閣—ロース
ベリー伯の豫算案反對—工場法案
の制定—歳費増額案—政友會の十
周年大會—直轄學校に對する修身
訓令—北極探險家の功名争ひ—火
星との通信

高橋誠一郎

雜 錄

領事裁判を論ず
亞米利加鐵道會社の概要

小倉和市
鈴木恒三郎

新著批評

加藤著産業政策
政之助

星野斯吉

廣 告

一金拾五圓也 牛場卓藏殿

右第一回寄附トシテ頭書ノ
金額ヲ賜ハリ候此段廣告候
也

明治四十二年十一月

三 田 學 會